

あとがき

人類の築いてきたあらゆる文化と同じように、「あそび」の文化も民族や人の作った境界の垣根を越えて伝播する。固有のものと思ってきた伝統的な娯楽も、そのルーツを尋ねれば意外なところからきていることがある。また、近年では交通手段やメディアの発達、資本の活動等の理由で、ますます世界の人々の娯楽は交流し合い影響し合っている。日本の国技とされ伝統の制約を厳しく守ってきた大相撲にも、外国人力士が横綱を張る時代となった。

本書では、これまで十年近くをかけて刊行してきた「くらし」シリーズの最後の一冊として、第三世界各国の民衆の暮らしとの関わりに視点を据えて、「遊び」の世界を取り上げている。恒例のとおり、『アジ研ニュース』第百四十号（一九九三年一・二月合併号）で特集した「第三世界の娯楽産業」に登場した二七編に各執筆者が加筆改稿したうえ、インドネシア・三平、マレーシア・鳥居、ミャンマー・桐生、ベトナム・出井、コロンビア・幡谷、ウルグアイ・吉田、補章（日本）・大岩川、の新稿七編を加えた三四編をもって、本書が成立した。

集まった各編が語る諸国・諸民族の多様な娯楽の独自性と普遍性については、はしがきで共編者の山本一巳が整理して述べているので、それを参照していただきたい。この小冊子を、と

りわけ楽しいものにしたというのが、私たちの念願であつたが、果たしてどれほどその気持ちが生かされているかについては、読者の方々の判定を仰ぎたい。

思えば、「はかり」（度量衡）に始まって「こよみ」（労働リズム）、「すまい」（住居問題）、「のりもの」（交通機関）、「たべものや」（外食産業）、「きもの」（日常着）と続いてきたこの「くらし」シリーズである。その棹尾を飾るこの第七冊目「あそび」で、執筆者は延べ二五二人に及び、取り上げられた途上国・地域の延べ数もこれに準じる。その全冊に編者として関わった立場から、ご愛読と励ましを賜った読者の方々へはもとより、小島麗逸氏をはじめとする共編者諸兄と執筆者の諸兄姉に心から感謝したい。そしてまた、毎回写真の仕上げについて協力を惜しまれなかった研究所マイクロ室参事の鈴木恒男氏および本書の製作を担当されたアジア経済出版会の斎藤輝夫氏、佐藤和子さん、研究所広報部編集第一課主任の新田淳一氏、いつも何かと助言をしてくれた同部参事の岩佐佳英氏にも厚くお礼を申し述べたい。おわりに私事ながら、これが私のアジア経済研究所における最後の仕事であることを幸福に感じつつ搁筆させていただく。

一九九四年二月

大岩川 嫩

70 「はかり」と「くらし」 第三世界の度量衡

小島麗逸／大岩川嫩編

●日本図書館協会選定図書

發展途上国のくらしに根ざした度量衡の多様な実態を、三十数名の地域研究者が体験的に論じ、解明する。第三世界の地域理解に必須の手引である。写真・図版多数。一九八六年刊

73 「こよみ」と「くらし」 第三世界の労働リズム

小島麗逸／大岩川嫩編

●日本図書館協会選定図書

三十数途上国の生産と生活のリズムを、地域研究者の眼で風土に根ざした多様な「暦」の世界に探る。巧まざる文明批評。写真・図版多数。一九八七年刊

78 「すまい」と「くらし」 第三世界の住居問題

堀井健三／大岩川嫩編

伝統的な途上国の庶民の住居は、近代化の波に洗われて変貌しつつある。都市のスラムに農村の集落に、その多様な実態を国別に浮き彫りにする。一九八九年刊

80 「のりもの」と「くらし」 第三世界の交通機関

吉田昌夫／大岩川嫩編

ベチャから飛行機まで——途上国の人々の暮らしの足として、経済活動の動脈として活躍する多様な交通機関のあり方を興趣豊かに解説する35編。一九九〇年刊

85 「たべものや」と「くらし」 第三世界の外食産業

岩崎輝行／大岩川嫩編

民衆のエネルギーの源泉である食の世界を、「外食」のありようから楽しくそして鋭く描き出す40編。途上国理解にも旅行者のハンドブックにもすぐれて有用。一九九二年刊

88 「きもの」と「くらし」 第三世界の日常着

宮治一雄／大岩川嫩編

風土ばかりか、体制に順応しあるいは反逆して、人々は日常の服装を変え、發展途上国の多様な歴史と生活のなかで繰り上げられる着衣のドラマ三十数編。一九九三年刊

地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦以後、古い植民地体制から脱して新興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここに存在する。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考へる場合、在来流行の理解によるパターンを以てするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナショナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考へられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実在即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七カ年余り、専らそういう道を行ってきたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。